

互了解性」によってこそ維持されてきたということである。

日本の現代中国学の世界において、以上のようなオリエンタリズムの意識構造は、明治近代以来とくに20世紀以後、今日に至るまで厳然として存在し続けている。

(4) 現代中国学とオリエンタリズム

前述の竹内の「(日本人としての) 自分のほうに問題がなくて、ただ(中国に) 行ったって、何も見えるものではない」という主張は、実は日中間にこのオリエンタリズムの差別の構造を含む「共同主観性」が存在することを自覚するがために提起されたものと言えた。すなわち竹内の方法は、いわば「現在の日本の中に現代の中国を見よう」とするものであり、逆に言えば「現代の中国の中に現在の日本を見よう」とするものとも言えたのである。

このように日本をして中国を映す鏡に代え、中国をして日本を映す鏡に代えるという方法が有効に成り立つゆえんは、言うまでもなく日本と中国の相互関係が、いわば「共同主観性」の構造によって成立しているためである。そしてこの「共同主観性」のゆえに、日本と中国の両国の「世界と世界意識」はともに両国の官民の間の相互意志によって変容を迫られてきたのである。たとえば日本の戦後の歩みは中国の戦後の歩みと密接不可分なものとして進行した。現に日本の戦後がアメリカの中国封じ込め政策から多大の恩恵を蒙った事実を否定する者はいないだろう。戦後日本の意志が戦災復興と安全保障の両面でアメリカに追随する道を選んだとすれば、それはまた中華人民共和国との敵対を選ぶ道でもあったのである。それゆえに日本人の中国研究者が日本の戦後の歩みに対するみずからの洞察を欠く場合には、中国の戦後の歩みに対する本質的理解も得ることは難しいということにもなるのである。むしろその逆に中国の戦後の歩みに対する洞察を通して、日本の戦後

の歩みに対する本質的理解を求める道も可能になる。

溝口雄三が竹内好を評して、「中国に仮託して実は日本を語ろうとした」と述べる時、この溝口の竹内評は実際には竹内の方法論が、相手の内に自分の姿を映す鏡を見るような「共同主観性」の構造が日中両国間に成立することを踏まえた方法である点を示唆するものでもあったのだ。

問題はこの鏡に映し出される日本像、中国像が「歪み」を持つという点にある。すなわち日中両国を相互に結ぶ「共同主観性」の構造の中に、認識の「客観性」を妨げる「歪み」が含まれるのである。「歪み」はまずは日本人の大半が、みずからの戦後の歩みが中国の戦後の歩みと深く結びついている現実を「見ない」か、「見ることができない」ことから生じている。

「歪み」をもたらした要因の第一は、日本人がアジア・アフリカ世界を評価するときの歴史観として、一国の歩みが何よりもまず自国内の諸条件、諸要因によって決定されるといういわば「一国自律発展論」的歴史観に強く傾斜していることを上げうる。この「一国自律発展論」は、その表現からも分かるように、日本と途上諸国との間に現実に存在する「共同主観性」の構造を見ようとしないうちにその特徴がある。

この「一国自律発展論」からは、以下のような日本近代史の評価と途上諸国近代史の評価が現れやすい。すなわち明治維新以後の日本は、一方で日本古来の伝統をよく生かしつつ、西洋近代の文明を自国に取り込む欧化政策に積極的に取り組み、それゆえに近代化に成功した。その意味で日本は近代化に成功する内発的自律的な諸条件たとえば殖産興業や基礎教育の普及に主体的に取り組む意欲、開明的精神というものを備えていた。他方、中国を筆頭とするアジア・アフリカ世界は伝統に固執する余り欧化政策に破綻し、近代化に立ち遅れた。すなわち彼らには近代化に求められる内発的、主体的諸条件が欠如していたからである。

それゆえにまたアジア・アフリカ世界は西洋列強諸国による植民地支配をこうむらざるを得なかった、等々。

要因の第二は、日本人がこうした一国内の近代化のための内発的自律的諸条件を一面的に強調する「一国自律発展論」的な史観に立つことによって、日本はみずから歴史の「主体」となり終えたと見なす一方、中国を含むアジア・アフリカ世界（東洋）を歴史の「客体」に沈むものと見なす傾向を強めた点を上げうる。

この主体化、客体化の過程は、西洋近代文明を近代化の導き手とする歴史観に立つものであった限り、主体を西洋に、客体を東洋に位置づけるものにならざるを得なかった。この結果、日本人の中国問題研究者の大半は当然にも自己を主体化してとらえる一方、研究対象としての中国を客体化し、自分を優越的地位に立たせることを疑問の余地なく前提する傾向を強めることになった。

要因の第三として、研究者（主体）が研究対象（客体）に対し優越的地位に立つのは、既述のようにその根本に西洋近代科学の方法論が働くという点が上げられる。その場合、科学実験室がそうであるように研究対象（客体）から研究者（主体）への意志的働きかけは、方法的に研究者の認識から遮断される。かりに完全に遮断し得ない場合もその働きかけは極めて微弱なものとみなされ、それゆえその影響を無視し得るとする方法論上の「歪み」が生じる。

以上の方法論上の「歪み」こそ、現代中国学に現れるオリエンタリズムの諸相にほかならない。むしろこのオリエンタリズムは日中両国間の「共同主観性」の「歪み」であるから、主体化された日本人のみがその差別構造の中にあるのではなく、客体化された中国人もまた同じ差別構造の枠内にあると言わねばならない。毛沢東時代の中国が西洋近代に対抗するある種の「反近代」の道を歩もうとしたこと自体、溝口雄三の言うとおりに、このオリエンタリズムの差別構造に中国が絡め採

られていたことを意味すると言えるだろう。このオリエンタリズムに対する呪縛こそ、大躍進や文革など毛沢東の政治実践を破綻させた根本因だった⁴²。

いずれにせよ、日本の戦後の歩みが中国の戦後の歩みと深く結びついてきた現実（共同主観性）を、日本人の大半が「見ない」か、「見ることができない」事態が生じるのは、まさにこの主体と客体の意識的な遮断から生まれたものだったのである。

さらに言えば、日本人の中国学者（主体）が研究対象の中国（客体）に対し優越的地位に立ち、自分の目的論的価値判断に基づいて研究対象の再構成を意図する働きかけを行う一方、研究対象から研究者に対する逆方向の意志的働きかけを無視する科学方法論では、当然研究者自身の目的論的価値判断に都合良く研究対象を評価する傾向を免れない。その場合は研究者の目的論的価値判断が、研究対象に対する因果分析との混同を引き起こす可能性を高める。それゆえにまた、研究の「客観性」も疑われることになるのである。既述のように社会・人文科学では研究対象から研究者への意志的働きかけを遮断することはできず、研究者と研究対象の間の「共同主観」的な存在状況は常に双方向の働きかけで流動変化し続ける。こうして目的意志に関して研究対象に対する研究者の優越的地位を前提する方法論に依拠する限り、上述の主客間の「共同主観的」な双方向からの状況変化は看過される結果になるのである。

(5) 目的論の排他性と現代中国学の「客観性」

社会科学・人文科学の学問研究において目的論と因果論の混同をもたらすもう一つの無視し得ない要因は、その目的論が研究者間あるいは研究集団間であい異なり、時には対立をも引き起こす場合がしばしばあるということによる。かつて日本資本主義論争をめぐって生じた「講座派」と「労農派」の対立などもその一例と言い得る。